Kabuki Actors Performing Abroad for the First Time

ASANO Hisae

Kabuki, as a representative art form of Japanese culture, continues to be introduced and performed overseas. The first such performance is considered to be held in August 1928 in the Republic of the Soviet Union by Shochiku Company, but actually, it was not the first overseas performance of Kabuki itself. Already in 1926, a troupe featuring the female actor Nakayama Emiko came to the United States, followed by Ichikawa Utaji's troupe in January 1928 and by the female actors Arashi Suzuhachi and Arashi Yachiyo in December 1928, where their performances received great acclaim. The fact that "Kabuki", now recognized as a national art form, was not first performed overseas by the large Japanese entertainment company Shochiku, but by the Koshibai (minor style Kabuki) troupe that specialized in Kabuki. Therefore, the common perception of Shochiku that had become the first company to perform Kabuki overseas is problematic for the history of modern theater. In this paper, I extracted the actual situation of their performances at the time from articles in Japanese American newspapers. In addition to confirming the vitality of Koshibai actors including female actors, this paper also reveals the acceptance of Kabuki by the U.S. side at the time and the position of Koshibai in the Japanese establishment.

研究ノート

松竹大歌舞伎以前に海外公演をした歌舞伎役者たち

浅野久枝　ASANO Hisae

一　はじめに

歌舞伎は能狂言と同様、日本の伝統芸能という認識が一般的になっている。日本文化の代表的芸術として歌舞伎は現在も海外に紹介され、海外公演も行われている。その端緒は、『歌舞伎海外公演の記録』(1)を見ると、昭和三年（一九二八）八月にソヴィエト連邦共和国に松竹合名会社が興行主となり、松竹所属の歌舞伎役者による公演とされている。このときは二代目市川左團次が座頭で、八月一日から二十六日まで、モスクワ、レニングラード（現サンクトペテルブルク）で上演した。大谷竹次郎は帰国後の発言の中で、歌舞伎を「我が国伝統文化の精髄である国劇」と位置づけ、それが海外公演で成功したことは「国際演劇事業」にとって価値のあることであり、「我が演劇史上に特筆」されるべき、と堂々と述べている(2)。その後も永山武臣と河竹登志夫の対談(3)でも昭和三年の公演から海外公演の話を始めている。このように歌舞伎の海外公演は昭和三年であるというのが常識化しているといって良かろう。確かに松竹株式会社としてはこのときが最初なのだが、歌舞伎の海外公演はこれが最初ではない。

以下に詳述するが、大正十五年（一九二六）には女役者中山延見子を看板にして松尾國三（当時は實川延十郎）の座組による實川延十郎一座が渡米して、日系人たちに絶賛され、その後、市川右田次一座も松竹よりも早く昭和二年（一九二七）九月から米国で興行を打ち、成功した。そして、松竹が訪ソした四ヶ月後の昭和三年十二月には、女役者嵐壽々八・嵐八千代一座が渡米して大好評で迎えられ、昭和六年（一九三一）には延見子たちの一座が再び渡米している。現在、日本国の芸術・演劇として認められている「歌舞伎」の海外公演が、松竹株式会社という大興行主によって始められたのではなく、それより先んじて歌舞伎専門の小芝居一座によってなされた事実はこれまでほとんど取り上げられてこなかった。「松竹が初めて歌舞伎の海外公演をした」という認識が常識化しているのは、近代演劇史のうえで問題があるのではなかろうか。そこには「国劇」「日本の古典芸能」としての歌舞伎を創り上げようとする国策、あるいは演劇界の思惑が見えてくる。その一方で、その当時、大歌舞伎よりランクが下とされていた小芝居一座が、国策や演劇界の思惑をものともせず、次々に海外公演をしていた事実からは、当時の小芝居一座が持っていたバイタリティーをまざまざと感じることができる。

本稿では海外の邦字新聞から、大正末から昭和初期の米国公演についての記事(4)を収集し、彼らの活動の実態を記録する。ただし、大正時代から昭和初年頃は日本国支配下であった台湾・満洲へは小芝居一座を含む多くの芸人、劇団も出かけているが、それは取り上げない。また公演演目からみて、あくまでも歌舞伎専門で海外公演をした一座のみを取り上げ、剣戟系、新派系、節劇（浪花節芝居）、その他曲芸、手品などの一座については取り上げない。

二　渡米した歌舞伎一座

1、中山（市松）延見子一座

これまでの拙稿の中で、中山延見子一座が米国公演をしたことは述べてきた(5)が、松尾國三『けたはずれ人生』、同じく松尾の「赤毛布の旅芝居」(6)に加え、米国・カナダの邦字新聞から、彼らの興行を細かく追ってみる。

大正期から昭和のごく初期に、米国には日系の興行会社がいくつかあり、その一つが日米興行株式会社であった。本社はロサンゼルスにあり、支社はサンフラ

ンシスコ、サクラメント、フレズノにあった(7)。大正十五年の春、欧米巡業を終えた初代松旭斎天勝の祝賀会に松尾国三（当時は實川延十郎）と中山延見子夫妻が招待された。その席で、天勝の夫、野呂辰之助が松尾に日米興行社からの依頼話を伝えた。それは、以下のような話だった。

母国を離れて三十年以上経つ日系移民一世が一番焦がれているのは芝居である。ぜひ歌舞伎が見たい。さらに、日本の芸術を知らない日系二世たちにも見せてやりたい。しかし、若い俳優でないと海外巡業は無理だ。その点、延見子と延十郎の一座はうってつけなので、海外公演をしてみないか、という内容である。

のちに大興行師として名をなした松尾のことである。文盲で、英語も当然喋れないが、大博打を打つつもりになった彼は日米興行が四分、松尾が六分（芝居の掛かりは松尾持ち）という歩合で引き受け「河内家實川延十郎一座」の渡米が決まった。一座は三十五人で「関西の腕達者の俳優ばかり」(8)だった。大正十五年十月十日、豪華客船春洋丸でサンフランシスコに乗り込んだ（サンフランシスコ邦字新聞『新世界』十月十一日記事）。一行は二人の他、實川晃幸、中村歌昇、中村玉之助、實川延吾、片岡登志若、中村仲三郎、實川延吉、市川三津女、片岡緑次郎。義太夫は竹本花菱太夫と豊澤竹之助。囃子方は杵屋雄次郎、杵屋長三、坂東豊二郎、花房升五郎である。その他、電気装置師、背景係、床山、衣裳方とある。松尾は、普段は七十余名の大一座だが、「そう大勢渡米する譯に行かず」立役も女方もできる役者、道具方も何人分も働けるものを選んだと述べ、また小道具類は屋根瓦まで、照明や電飾も「最新の電気應用のもの」を持ち込んだと意気込んだ談話を同紙十月十一日記事に載せている。また同紙上の宣伝文には「大坂歌舞伎」とあり、上方系の一座であるという自覚があったものと思われる。

十月十二～十四日は桑港（サンフランシスコ）のガーリック座で公演が行われ、三日とも札止めとなる大盛況だった（同紙大正十五年十五日記事）。十六～十八日は桜府（サクラメント）のボクシングホールで公演し、十九～二十一日は樓臺（ローダイ）の樓臺会館、二十二～二十四日は須市（ストックトン）の朝日座、二十五～二十六日はコンコードのイタリアンホール、二十七～二十八日はペンリンの日本人ホール、三十～三十一日はメリスビルの日本人ホール、十一月二～三日はウォルナットグローブの河下会館、五～六日はフレズノの日本ホール、七～八日はバイセリアの市公会堂と、連日の公演であった。

十一月十二～十五日は羅府（ロサンゼルス）の西本願寺ホールで公演した。十四日の日曜日は昼夜二回興行を打っている。ロサンゼルス公演では、チャーリー・チャップリン、ダグラス・フェアバンクス、メアリー・ピッグフォード、ミリアム・ホプキンスに加え、ハリウッドで活躍していた早川雪洲、上山草人などの日本の俳優たちが観劇に来たことで、松尾は米国公演の成功を確信している(9)。さらに、好日家のチャップリンから一座の幹部が自宅に招かれた。また、ハリウッド女優ノーマ・シアラーからも招待され、メトロ・ゴールドウィン撮影所で面会した(10)。ロサンゼルスの邦字新聞『羅府新報』大正十五年十一月十四日記事には天候不順にもかかわらず、「初日から札止め」の好評で、二日目も札止めとなった（同紙十一月十五日記事）。そして『時雨の炬燵』で子役をした少女に「ゐづゝ」、「延見丸」という芸名を与えて喜ばれ、この姉妹は熱心に稽古をしたという（同紙十一月十五日記事）。現地の子を使うのはこのときだけではなく、同紙昭和二年一月十三日には「御當地の子役出演御覧に供すべく」と宣伝し、同年一月の公演では「子役として當市の片岡時計店の娘と菊川亭の娘とが出演」（同紙一月十四日記事）とある。

さらに興味深いことに、同紙大正十五年十一月十二日記事には延十郎一座で上演する新作脚本を募集している。松尾と延見子の「渡米記念として是非共米国を背景とし在留日本人の生活を描いた脚本を日本に土産にしたい」との希望により公募することになった。応募の条件は米国内に題材を取ることだが、日本国内でも『父帰る』などの新作ものが多く掛けられているので「マゲもの」（時代物）でも近代劇でもかまわないとし、十二月中旬締め切りとある。歌舞伎になじみのない在米日系人たちに歌舞伎に対しての興味を持たせるための企画だったと考えられる。公募は実際に行われ、のちに、昭和二年一月十六日、ロサンゼルス再訪問公演の千秋楽において『羅府新報當選懸賞脚本　情夫殺し　一幕』として上演された。

大正十五年十一月の、ロサンゼルス初回公演の後は、十一月十七～十八日がブロウリーの白人ホール、十九日はエルセントロ仏教会、二十～二十一日はサンディエゴ仏教会で公演した。歌舞伎公演には仏教会も協力していることがわかる。

十一月二十七～二十八日は佐市（サンノゼ）の日本人ホール、十一月三十日は華村（ワトソンビル）の日本人ホール、十二月三～四日はサリナスの日本人ホール、十二月五～六日は王府（オークランド）の市公会堂で公演し、その後米国本

土を北上して、十二月十一～十三日はオレゴン州ポートランドのキヤシノ座で興行を打った。

松尾によればその後、バンクーバーに行き、十二月二十五日はシアトルで公演が予定されていたようである(11)。ところが、大正天皇崩御の知らせが入った。「二度とこれないかも知れないシアトルである。この人たちのために、せめて、きょうだけでも芝居の幕を明けるのが情ではないか」と松尾は苦慮したが、「われわれは日本人である」から喪に服すべきと、公演を中止した。舞台で中止の挨拶をし、気持ちを説明し、必ずシアトルに戻ってくることを約束すると、日系人たちも納得をして一緒に黙祷を捧げたという。その後、二十一日間を喪に服したと松尾は記録しているが(12)、『新世界』大正十五年十二月二十八日の宣伝にはサクラメントのボクシングホールで昭和二年正月元日から三日まで、八～九日はストックトン、十～十一日にはフレズノでの「お名残興行」の予定が載る。その中止を知らせる記事はなく、一月十日まで毎日のように宣伝文が載った。喪に服したのは七日間程度で、シアトルの公演のみ中止にしたものと思われる。

年が明けた昭和二年一月十四～十六日の三日間は、ロサンゼルスでの二回目の興行で、「お名残り興行」が西本願寺ホールで行われた。『羅府新報』一月十六日記事には「式三番から先代萩、梅忠封印切り 何れも大受けで特に子供が上出来だったがウイーキーデーに拘らず可なりの入りで土日両日の大入り盛況が想像された」と記される。二日目も「大人気で大入り」(同紙一月十七日記事)。同紙一月十八日紙面には、千秋楽について「劇界に刺戟を與へて延十郎一行引揚げ」の見出しが踊り、『本蔵下屋敷』も『すし屋』も良かったが「本社で募集した筋師氏の『情夫殺し』も素晴らしい出来で脚本も良く俳優も十二分に役役を仕生かし感動と喝采を博した」とある。『情夫殺し』は先に述べた、一般公募による新作狂言である。さらに千秋楽の翌日、一月十七日の月曜日には、義太夫の花菱太夫と竹之助が「當地のデン〳〵連がお名残にとて」、義太夫愛好家の発表公演の最後に、『紙屋治兵衛』を語るという、素義会を催した。

ロサンゼルスを出発した一行は一月二十一日からサンフランシスコで興行を打った。この時には元米国大統領ウィルソンの夫人からの招待を受け自宅を訪問した(13)。彼女は日本びいきで歌舞伎ファンだったという。

その後、二十八～三十一日はシアトルの日本館ホールで最後の公演をした(シアトル邦字新聞『大北日報』一月二十六～三十一日記事と宣伝文)。シアトルの人々に「必ず戻ってきます」という昨年十二月に交わした約束を果たしたのである。また、三十一日は日延べの追加公演だったが、シアトル小児園新築資金へ寄附のための公演であった。

一行はシアトルを発ち、ハワイに到着。昭和二年二月二十六日～三月五日までの七日間(14)、ホノルルの日本館で公演した(ハワイ邦字新聞『布哇報知』二月二十四日宣伝文)。同紙二月二十六日記事では「来ぬ前から大評判」で、ホノルルだけで各地での公演がないことから「芝居好きは耕地からも大分出かけて来る模様」と報じている。同紙三月一日の宣伝には「連夜の満員」と記され、二日の記事では、地方から多くの人が詰めかけ「人気湧く大歌舞伎　昨夜は七時半に大入り札止め」の盛況であったと報じた。三月四日の公演も雨天にもかかわらず大入りだった(同紙三月五日記事)。同じ場所での興行であるため、四の替りまで演目を変えて上演した。同紙三月二日の「歌舞伎芝居三日目合評」では、囃子方、下座の不備や、舞台も花道も狭いとの注文がつくが、延十郎、延見子その他俳優陣の演技には高評価が多く、また、小道具類も持参しているので「此處で見られない揃ったもの」と満足度の高い評価がなされている。同紙三月九日記事によれば、好劇家の懇望により九日十日の両夜、日本館でお名残興行が行われた。そして一行は三月十一日にピアス号で帰国の途についた。ほぼ五ヶ月の公演活動だった。

この一連の米国公演ではすべて歌舞伎演目が上演された。新聞紙上から書き出してみよう(順不同)(15)。『寿三番叟』『引抜鞍馬だんまり』『鳥辺山心中』『壇浦兜軍記　阿古屋琴責の場』『義士外伝　土屋主税』『木村長門守血判取』『良弁杉由来』『輝虎配膳』『恋飛脚大和往来　新町越後屋の場』『伽羅先代萩　竹之間より御殿床下まで』『梅川忠兵衛　封印切り』『本蔵下屋敷』『紙屋治兵衛　時雨の炬燵』『神崎与五郎東下り』『京人形』『加賀見山　敵討まで四幕』『つづれの錦　春藤次郎右衛門　大安寺堤』『大石内蔵助　南部坂雪の別れ』『日高川』『義経千本桜　すし屋』『艶姿女舞衣　酒屋』『情夫殺し(羅府新報当選懸賞脚本による新作)』などで、最後の現地で公募した脚本以外はすべて歌舞伎演目で、剣戟系演目は全く入っていないことに注目したい。

『阿古屋の琴責』は「延見子の得意もの」で、「好劇家連の興味をそゝって」いる

とされ（『羅府新報』大正十五年十一月十五日記事）、阿古屋の三曲を披露した。ハワイでも『阿古屋の琴責』は「今晩の出し物では之が一番、布哇では又と容易に見る事の出来ぬ芝居だ」（『布哇報知』昭和二年三月二日記事）と注目されている。『日高川』の人形振りは「大出来」で「見物は何れも大満足」をし、『時雨の炬燵』ではおさんと小春の二役を勤めた（『羅府新報』大正十五年十一月十四日記事）。

この興行で松尾が得た利益は「米ドルで五十万ドル、当時日本円は一ドルに対し、二円余であったから、現在の貨幣価値に換算すると約三億円に相当する巨額なものであった」(16)という。松尾の手腕のすごさを示す数字である。

さて、その柳の下をねらって、松尾国三・中山延見子の一座は再び渡米した。松尾は昭和六年の春に、日米興行社から再度の渡米の依頼を受けた。日本も米国も不景気だったが、日本に比べればそれほどでもないのではと強気に考えた松尾は、五十人の一座を結成した(17)。この一座には、のちの三河屋市川市蔵や、義理の弟岩井小紫も参加していたものと思われる。

この出航は、松尾によれば昭和七年（一九三二）五月二十八日とあるが、米国滞在中に満洲事変が勃発したとあり、『新世界』や『羅府新報』には昭和六年に彼らの公演記事が載るので、やはり二度目の渡米は昭和六年である。これまで発表した拙稿(18)で、彼らの二度目の渡米について、昭和六年と七年と、記述が二転三転したが、ここで改めて訂正し、確定したい。また、同年六月四日の『新世界』記事に六月五日から八日までサクラメントで公演しているので、「五月二十八日」も、出航日ではなく入港日の間違いであろう。

一行が乗船したのは秩父丸である。船上では乗客の「隠し芸」が行われたが、彼らは、本公演で上演予定だった延見子の出し物『娘道成寺』を舞台稽古のつもりで上演した。長唄二挺二枚、所化四人が出ると舞台がいっぱいだったが、新調した衣裳の見事さ、引抜の鮮やかさ、延見子の見事な舞踊で、大喝采だったという(19)。このときのことは藤田栄（のちの市川市蔵）も娘の多恵子（岩井小紫）たちによく語っていたそうである。

サンフランシスコ港に到着した一座は、六月から興行を開始した。六月五～八日のサクラメントのボクシングホールでの公演ののちは、十六日にはデレーノ、十九～二十二日の四日間はロサンゼルスの大和ホール、二十三～二十四日はサンディエゴの日本ホール、二十六～二十七日はガーデナの大和座、七月十五～十六日はオークランドの仏教会、十七～十九日はサクラメントのボクシングホール、二十～二十一日はフレズノの日本ホールなどで、七月二十三～二十五日はロサンゼルスの大和ホールでの御名残興行を行った。その後八月六日にハワイに渡り、七日のホノルル日本館を皮切りにハワイ各地を巡業し、八月二十八日～九月一日のオアフ劇場で千秋楽を打った(20)。

ハワイでの興行は成功したようだが、米国本土での興行は「不景気に呪われて観客は豫想程にはなかった」、「不景気とはいえ両夜とも余り淋しい見物人であった（『羅府新報』六月十六日、二十八日記事）とあるように、渡米当初から、前回のような大入りはあり得なかった。それでも、前回同様、衣裳は完備し、電気応用大仕掛けを準備し、前回よりも腕こきの役者を揃え、今回は「米人方面へも進出したい」と松尾は意気込んでいた。出し物は『実録先代萩』『土屋主税』『娘道成寺』その他、『石切梶原』『松王下屋敷』『心中天網島　河庄』『鳥辺山心中』『三勝半七　あかね染』『八百屋お七』『芦屋道満　葛の葉子別れ』『お千代半兵衛』『根引の門松』『供奴』『朝顔日記』『本朝廿四孝』『伊勢音頭』『野晒し吾助』、『弥次喜多膝栗毛』『新作所作事墨塗り』『新作所作事　月の玉川お兼さらし』『浪花侠客』『押しかけ花嫁』など、前回掛けなかった演目を演じた。とくに新作狂言は「軽い喜劇物」であり、その他『弥次喜多』のように、笑える演目もずいぶん採り入れ、集客を狙ったものと思われる。

ハワイ興行の後、松尾はもう一度米国本土での公演を考えたようだが、七月の平壌事件以後、排日運動が高まった本土では日本人の外出もままならない状況になっており、松尾と延見子と義太夫連だけが本土に渡り、その他の劇団員は帰国した。足かけ五ヶ月の公演活動だった。この公演中、手先の器用だった市川市蔵は団員の髪の毛の散髪をしたといい、また、ローマ字も読めるようになったそうである。

当時、サクラメントには歌舞伎を演ずる日系人少女たちによる、いわゆるチンコ芝居の、山村少女劇団と称する劇団があった。米国本土に戻った松尾と延見子は、この劇団の少女たちを指導し、ロサンゼルスなどで十月から十一月に公演した。ときには延見子も出演した。十一月七～八日、オークランド仏教会ホールでの公演（『日米新聞』十一月五日記事など）を終えて、二人は帰国の途についたと

いう[21]。昭和六年十二月三十一日から翌七年の一月三十一日まで名古屋歌舞伎座で、「米国帰朝公演」と銘打って興行している[22]ので、昭和六年の年内に帰国したことは間違いない。

この後、日系人にとっては受難の時代に突き進んでいき、日本からの芸人達の渡米は不可能になっていった。

2、市川右田次一座

再び昭和二年に時間を戻そう。

市川右團次門下の市川右田次一座も松竹よりも前に海を渡っている。昭和二年九月一日に横浜を発ち、九月十日にホノルルに着いた[23]。

『布哇報知』九月十日宣伝文には「本日の天洋丸にて来布　見逃すなかれ　布哇で二度と見られぬ京阪撰抜名優揃　布哇空前の大興行　新渡来大坂歌舞伎大一座十五名　名優市川右田次一座御目見得　来る九月十五日より二十二日まで…七日間　布哇の興行はホノルルとヒロの二ケ所限り」とあり、右田次一座の興行がホノルルの日本館で行われると載っている。興行主は大和興行会社である。右田次以下の役者は、澤村宗七郎、山村内匠、尾上多三郎、中村志津子（女役者）、片岡嶋右ヱ門、澤村徳昇。子役は中村房子、市川ぼたんの二名。義太夫・囃子方は豊竹司組太夫、成駒家春吉（女性）で、新聞紙面には、彼らの顔写真入りで宣伝された[24]。同紙九月十六日の宣伝文には「初日大入り満員を謝す」と記され、九月十七日からは二の替りで、九月十九日にも大入り満員の謝辞が載せられた。同紙九月二十日記事では『老後政岡』において右田次が勤めた綱村公の「重みもよし」、「宗七郎の政岡、老衰のしぐさこまかくはまり役」などのほか、多三郎、徳昇、山村内匠の「若手が力一杯に演ずるのは気持ちがよい」と各役者の演技を褒め、「引き締まった舞臺」と高評価が載る。十九日からは三の替りで「昨夜も大出来」（同紙九月二十一日記事）と評される。二十日から四の替り、二十一日から五の替りが上演された。このとき上演された『肥後駒下駄』では

「何と云っても右田次の駒平が花形、宗七郎の中川縫之助も申し分のない出来栄で「勇者の駒平」と「知者の縫之助」の異なった性格をよく現はし而も両人の藝がピッタリと合ふところ所に味がある 内匠の八坂源次兵衛は珍しく悪が利き右田次 宗七郎の「藝の気合い」を受け返してゐたのは上出来」

と細かく評し、「何と云っても此の一座は粒が揃ってゐる上に、座員一同が汗だら〳〵の力演見せるから嬉しい」と高く評価する一方、「後者の腕に比較して舞臺や小道具が見劣りするのは気の毒」とも述べている。二十二日には「大入御禮のため土曜日まで二日間日延べ」とし、六の替りを上演。二十三日には七の替り、二十四日は八の替りで、この日が千秋楽だった。結果として九日間の興行となった。二十三～二十四日は新聞紙上の割引券を持参すれば入場料五〇セントの割引サービスがあった。毎回、非常に高い評価を得、大入りで大盛況だった。

九月二十六日の夜、マウケナワ号で馬哇（マウイ）島に渡りワイルクで公演、布哇島に戻ってヒロの有楽館公演の後、カウアイ島に渡りリフェおよび数カ所で公演した（同紙九月二十五日、十月三日、二十七日、『馬哇新聞』十月三日、『日布時事』十月十四日記事）。そして、十月二十八日出帆のピアス号でハワイから米国本土に向かい、十一月三日、サンフランシスコに乗り込んだ。十一月五日から金門学園ホールの三日間の公演を皮切りにロサンゼルスを初め、ストックトン、ウォルナットグローブ、サクラメント、メリスビル、オークランド、サンノゼ、ワトソンビルと精力的にカリフォルニア州の各都市を廻った（サンフランシスコ邦字新聞『日米新聞』『新世界』の十月から十二月の記事）。年が明けた昭和三年元日から三日間は、ロサンゼルスの西本願寺ホールで正月公演が行われ（『羅府新報』昭和三年一月一日記事）、『日米新聞』昭和二年十二月二十二日記事には、正月興行のために衣裳を日本から取り寄せ、大道具・小道具も新たに準備していると報じている。この後、数カ所の地方巡業（『日米新聞』一月五日、『羅府新報』一月十二日記事）を行った。

ついで、一月二十四日と二十五日の二日間、サンフランシスコのフェアモント・ホテルの「舞踏場」ノーマン・ホールで公演した。主催は日本協会（Japan Society）である。外務省資料[25]によれば、サンフランシスコ「ジャパン・ソサエテー」の会員レース夫人（Mrs. Fransis Leis）より「日本藝術紹介ノ意味ニテ歌舞伎芝居ヲ催シテハ如何」との発議があり、「目下米国婦人及男女学生ニ日本研究熱ガ勃興シツツ」ある折から、この催しにより彼等の間に「センセーション」を起こすことは時機に応じていると、成功を危ぶむ声を抑えて上演が決定された。こうした米国側の動きは、様々な文化や流行が受容され、商業娯楽が普及しつつあった一九二〇年代の米国ならではの反応なのかもしれない。一方、マスコ

ミの反応からは、日本側からの視点、別の側面、思惑を読み取ることができる。

『新世界』の昭和三年一月二十二日記事では「古典的で優美な日本の歌舞伎が紹介されると云うので當地の米人好劇家は非常な興味を以つて開催日、廿四、廿五の両夜を待つて居り一つのセンセーションをまき起こしてゐる観がある」と記される。演目は初日が『実録先代萩　忠節女夫松』『土屋主税』、二日目が『大岡政談　徳川天一坊』『菅原伝授手習鑑　寺子屋』を演じた。同紙によれば「前景気は非常なもので日本劇の優美と深刻は右田次一座の藝と相俟つて米人に多大なる好印象を刻印す可く右田次もフエアモント・ホテル内の晴の舞臺にたち日本藝術の粋を米人に紹介するのであるから特に力を入れて熱心に演じることになつてゐると」とある。日本協会幹事のレース夫人は「今回の催しは各方面の賛同を得たため、豫期以上の好評で既に二晩開演する中前夜の観覧席は全部賣り切れ、第二夜の席も續々申込みがあり其の中にはクラッカー夫人を始め市の社交界の重だった人々から申し込みがあるので如何に今回の催しが廣く興味をもたれたかわかりません」と語っている。また、在サンフランシスコ総領事館の中島薫氏がチケットの販売を担当[26]するなど、かなりの力の入れようである。レース夫人は上演前に歌舞伎に関しての解説もしたようである（『新世界』一月二十四日記事）。中島氏とレース夫人により、事前に英文のプログラムが作られた[27]こともあり「政界及實業界ノ有力者、社交界ノ重立ル者大学教授及学生藝術家批評家及新聞記者等ヲ網羅シ約千五百名」が観覧し、両日とも満員だった。一座の舞台は極めて好評で、当時サンフランシスコ交響楽団の指揮者で、著名な音楽家、アルフレッド・ヘルツ氏は、「始（ママ）メテ日本ノ真正ノ藝術ヲ見物シタ」と総領事の井田守三に賞讃の言葉を残した。サンフランシスコの英字新聞各紙もこぞって好意的な評を載せている[28]。右田次一座の澤村宗七郎もインタヴューに答え「最初は在留邦人相手の積もりでしたが、非常な人気をとり（中略）外國人観客の好評を博しました。殊に排日紙サンフランシスコクロニクルさへ寫眞入りの劇評記事を三日間に亘つて載せて呉れたのは意外です」[29]と述べている。『新世界』一月二十五日記事でも「東洋の優美な古典劇を見やうと待ちに待つて居た米人観客にとつて右田次一座の藝は纖細にして優雅而も深刻味を帯びて居るので非常に興味深く一挙一動観客を魅し盡さずには置かぬと言ふ有様で好評沸くが如く初日満員の大人気に主催者は大いに喜び満足して居る」と記された。一月二十六日の記事では「米人の耳には不可思議な囃子の内に幕が開くと興味に輝く観客の眼の前に目醒めるばかりの美しい三番叟が現出し幽（ママ）しくも雅致に富むその舞踊に聴衆は早くも魅され其が終わると称讃感嘆の聲は一しきり止まなかつた」。『土屋主税』でも「一座の洗練されし藝を軽重両方面の気分に現し日本語を解せぬ米人の前に立派にやつてのけて此れも大成功で米人達は何れも歌舞伎の妙技を味」わっていたという。

この公演に続いて二月二日、桑港日本人会主催、日米興行会社・布哇大和興行社提供の「大坂大歌舞伎　市川右田次一座　学園寄附演藝會」の公演が、「邦語学園」の金門学園ホールで行われた（『新世界』一月三十一日宣伝文）。同紙二月二日記事によれば「今回は加州大学ドラマ科の教授で最近欧州藝術視察より帰桑せるテムヒユー氏や、同校美術家連の一行十五六名と當市一流の劇評家連三十餘名がレース夫人と共に総見物をする事になつてゐる。是れで歌舞伎の真價は米人社会に一の興味から更に研究態度に進んで来た譯である」とする。そして、米国人観劇者たちの態度は静粛であったため、芝居情緒を削がぬよう、喧噪を避けるために子供は同伴しないようにと呼びかけている。「古典芸能」としての歌舞伎を貶めないよう、日系人達に釘を刺したものとみえる。

延十郎・延見子の一座は日系人中心に興行を組み立てて成功を収めたが、右田次一座の公演は総領事館や日本協会の肝いりだったので、米国人にも歌舞伎を鑑賞する機会となった。さらには、歌舞伎の「芸術性の高い日本が誇る古典芸能」としての価値を米国人に認めさせたいという論調が強い。まさに文化交流の先鋒として右田次たちの一座は活躍したといえる。

彼らが上演した演目を順不同で書き出してみる。『寿式三番』『実録先代萩　忠節夫婦松』『紙屋治兵衛　時雨の炬燵』『鬼一法眼三略巻』『大石東下り』『旭袂玉藻前三段目』『彦山権現誓助太刀』『老後政岡』『忠臣二度の清書』『二巴（ふたつどもえ）　石川五右衛門　釜煎』『弁慶上使』『義士外伝　土屋主税』『肥後駒下駄』『菅原伝授手習鑑　寺子屋』『奥州安達原　袖萩祭文の場』『伊勢音頭恋寝刃』『大岡政談　徳川天一坊』『摂州合邦辻』『加賀見山』『梅川忠兵衛　封印切』『伽羅先代萩』『敷皮曾我』『新世話劇真如』『お染久松　野崎村』『仮名手本忠臣蔵（五段目から七段目）』『本蔵下屋敷』『岸姫松（きしのひめまつ）轡鑑（くつわかがみ）』『鈴木主水白糸噺』『木村長門守血判取』『神霊矢口渡』『馬盥』『どんどろ大師』『京人形』『義経千本桜　庵室より寿司屋まで』である。新作は『新世話劇真如（額田六福作）』だけだが、これはロサンゼルスの西本願寺ホールで上演

したときの演目で、信者を意識した選択であったろう。それ以外の演目はすべて歌舞伎演目で、剣戟系演目はない。

さて、サンフランシスコの公演は成功裡に終わり、米国本土を後にして、二月九日には再度ハワイを訪問した（『布哇報知』二月九日記事）。オアフ島内の都市を皮切りに、ホノルルでは日本館などで興行を打った（同紙十九～二十六日宣伝・記事）。新聞紙上にはサンフランシスコでの大成功を伝える記事が複数載せられ、クロニクル紙が古典芸術と賞揚し、このように英字新聞に紹介されたのは珍しい（同紙二十二日記事）とし、「何れも海外に馴れてきたので舞台が一層引き立ち」「大芝居だと好評」（同紙二十三日記事）と記す。ハワイ在住好劇家たちの「是非とも右田次の政岡が見たい」との希望により『伽羅先代萩』を上演した（同紙二十四日記事）。二十五日はホノルルでの千秋楽で、三月いっぱいはカウアイ島やマウイ島などで、各地を巡業し、四月十六日と十七日、ホノルルの日本館で御名残興行を行った（同紙四月十四～十七日記事及び宣伝）。その後、四月三十日横浜入港のゼファーソン号で帰朝した[30]。八ヶ月の長きにわたる公演活動だった。

総領事の井田守三は、予想を上回る大成功を収めたと外務大臣・総理大臣の田中義一に報告をした。その田中から三月二十七日に予想外の返信があった。その内容は、日本の芸術を海外に理解させようとする趣旨は「至極結構」だが、「本邦藝術ノ神髄」を伝えることを「本旨」とすべきあって、「未熟若シクハ浅薄ナルモノ」を紹介すれば却って本邦の芸術の真価に対し誤解を与えることになる。今回の報告にある俳優は「我劇界ニ於テ何等地歩ノナキ人々」であり、彼等の演技が「歌舞伎ノ真價」という印象を与えたことは、「甚不本意ノ次第」であるから、今後はあらかじめ「藝術家ノ地位、素質」などをしっかり吟味するように、というものだった[31]。倉田が指摘するように[32]、劇界の覇者となりつつあった松竹に所属する俳優の演ずる劇だけが「歌舞伎」であって、小芝居役者の右田次たちのように、歌舞伎界に地歩も地位もない俳優の上演する歌舞伎は「未熟で浅薄なもの」と決めつけている。小芝居に対する体制側からの位置づけがよく分かる話である。

そして、その松竹所属俳優の市川左團次一行が昭和三年の八月に訪ソし、権威づけられた「歌舞伎」の「初めての」海外公演が実施されたのである。

3、嵐壽々八・八千代一座

左團次たちの海外公演に遅れることわずか四ヶ月、女役者嵐壽々八・八千代一座はサンフランシスコを皮切りにロサンゼルス、シアトル、ハワイなどを巡業して、歌舞伎公演を行った。

『新世界』昭和三年十一月二十六日記事には、嵐壽々八一座がコレア丸で横浜港を出発し、十二月七日頃に到着すると知らせている。実際に十二月七日に到着し、十二月九～十日はサンフランシスコ金門学園ホール、十一～十二日はオークランド、十三～十四日はストックトン、十五～十六日はサクラメント、十八～十九日はメアリーズビル、二十二～二十三日はフレズノ、二十四～二十五日はバイセイリア、二十六～二十七日はデレーノと、連日の興行である（同紙十二月三日、七日、十三日、十七日、二十八日記事および宣伝文）。「桑港上陸以来北加各地を巡行中なる女歌舞伎　到る所大入り満員」（『羅府新報』十二月二十二日記事）だという。そして、年が明けて昭和四年（一九二九）一月元日から三日まで、正月興行をロサンゼルスの大和ホールで行った（同紙昭和三年十二月十四日、二十二日、二十八日、昭和四年一月一日記事）。

その後、サクラメントなどの都市を廻り（『新世界』一月二十四、二十六日記事）、「これで當分日本芝居は来ぬ」として二月八～十日まで再び大和ホールで公演した（『羅府新報』二月四日記事）。「前回の開演に秘蔵子役天才兒嵐八千代が大人気を博した事とて今回は好劇家連に依って八千代會が組織され初日に總見するといふ騒ぎ」だという。前回の公演とは、正月公演のことであろう。同紙二月八日記事では八千代会の向こうを張って羅府料理屋組合でも総見することにしたので、初日から大入り満員であろうとし、「興行會社でも此の人気に大張り込みで場内にストーブを据えつけ観客が温かに観劇気分を味へる様にする筈であると」と景気のよい話が載る。初日二日は大入り（同紙二月十一日記事）で、八千代が大人気であった。八千代は大正八年（一九一九）年生まれなので、数え年十一歳だが、『新世界』紙上でも、『布哇報知』三月二十四日記事でも「僅かに九歳」と記され、幼いことを強調して報道されたようである。

このとき八千代が勤めた役は、『実録伊達礎』では千代松、『熊谷蓮生坊』では熊谷蓮生坊、『史劇大楠公』では楠正行、『弁天小僧菊之助』で弁天小僧、『石童丸』では石童丸、『お千代半兵衛　八百屋の献立』では老け役の母親おくま、である。

熊谷や母親おくまという、大人が勤める役を演じている。

ロサンゼルスの公演後、シアトルへ行き、二月二十二～二十四日はシアトル日本館で「女歌舞伎　嵐壽々八一座」の興行を打った（『大北日報』二月十八～二十三日宣伝文）。シアトルののちの動向はつかめないが[33]、『布哇報知』三月二十四日の記事によれば「廿九日から日本館に子供の辨慶が出る　嵐壽々八の歌舞伎座」との見出しで、「加州各地で大好評を博しつつある歌舞伎嵐壽々八一座二十五名」がウィルソン号に乗船してホノルルに向かっており、三月二十九日からホノルルの日本館で開演する予定と報じた。ホノルルの公演は、日米興業布哇支社創設三周年記念興行として壽々八一座を招聘したという。三月二十九日初日で、四月六日まで連夜、行われた。演目はほぼ、日替わりである。

観劇者にはブロマイド絵葉書四枚一組、八千代の弁慶の写真入り歌舞伎ハンカチを全員に配り、劇場内も歌舞伎仕様の飾り付けを施し、歌舞伎気分を盛り上げていると報じた。そして「中心花形」は「僅か九歳」の嵐八千代で、「重の井子別れ」の三吉などの子役はもちろんのこと、『勧進帳』の弁慶にも期待を寄せている。当時日米興行株式会社社員であった森野正一は「日本から渡米した嵐寿々八一行に嵐八千代という十二才位の少女がいたが、彼女の勧進帳の弁慶は実にうまく、一行のピカ一であった」[34]と記す。八千代は小柄だったと岩井小紫（兼元多恵子）は記憶しているが、この当時は大柄だったのであろうか。同紙三月二十四日の全面広告では、弁慶の扮装をして形をきめた八千代の写真が大きく載る。富樫は市川瀧代[35]という女役者が勤めたが、先の記事には「八千代の一方を張って藝が確かなのは市川瀧代である」とあり、大正十五年や昭和二年の嵐壽々八一座の公演では『加賀見山』の岩藤や『弁天小僧』の日本駄右衛門などを演じ、『色彩間苅豆』では壽々八の累に絹川与右衛門を勤めている。富樫と弁慶の「呼吸がシツクリ合つて藝熟と力の調和が大向うを唸らせねば止まない、藝に於いて確かに座長に優ると云われて居る」とされる。座長の壽々八に優ると評されるような芸達者な大人の役者、瀧代に対し、八千代の演技は引けを取らないものだったということになる。『加賀見山』では瀧代の岩藤に、八千代はお初を勤め、「お駒才三」では剽軽な丈八に扮して「奥からぬつと丈八が、お駒様オイ〳〵オイ」てな調子で滑稽にして且つ達者な芸を見せる」と期待され（同紙三月三十一日記事）、「上々の出来」だったという（同紙四月二日記事）。同紙四月四日の記事では、壽々八の累が「凄い所を見せ」、再演の『勧進帳』は二度見ても「飽かぬ舞臺」で、なおかつ長唄連中が今まで来た劇団の中では「一番整つて」いたという。八千代の弁天小僧は「子供と思はれぬ達者ぶり」で、「楓女の南郷力丸もよかつた」とある。嵐壽々八は明治二十七年（一八九五）生まれ、市川楓女[36]は明治二十八年（一八九五）頃の生まれなので、八千代の舞台は子ども歌舞伎ではなく、大人の中に八千代が混ざって、大人が勤める役を演じていたことがわかる。一方で「傾城阿波鳴門」では子役のお鶴を演じ、「八千代のお鶴は見もの、確に観客を泣かせずには置くまい」という。また四月五日の記事には「嵐壽々八一座の歌舞伎は女役者ばかりに拘らず手揃いであるため毎夜よい芝居をみせ好評嘖々たるものあり」と高評価である。そして千秋楽にはロサンゼルスの公演で見せた『八百屋』のおくまという老け役を八千代が演じて見せた。連日大入りであった。この公演後、四月十一～十三日までの三日間、モイリリ母の会主催の「基金募集大演藝會」がモイリリイリのマザーライス幼稚園内で行われ、壽々八一座も出演し、チャリティーにも協力をした。

彼らの上演した演目を順不同で列挙すると、『鶯塚』『実録伊達礎　老後の政岡』『熊谷蓮生坊』『石井常右ヱ門』『史劇大楠公　桜井駅決別の場』『弁天小僧菊之助』『石童丸』『お千代半兵衛　八百屋の献立』『世話情浮名横櫛』『寿式三番　引抜だんまり』『お駒才三』『伽羅先代萩　竹之間より御殿まで』『勧進帳』『一條大蔵卿』『重の井子別れ』『加賀見山』『お半長右衛門』『京人形』『怪談累物語』『怪談ホトトギス（曾我綉侠御所染）』『傾城阿波鳴門』『お染久松　野崎村』などである。壽々八一座も歌舞伎演目だけで興行したことがわかる。

五月九～十一日までホノルル日本館で御名残興行を行い（『日布新聞』五月九～十一日宣伝）、十六日出航のリンカン号で帰国した。七カ月にわたる公演活動であった。

三　小芝居一座のバイタリティー

そもそも、鎖国を解いて以後、すぐに海を渡った芸人は曲芸団であった[37]。曲芸は言葉ではなく身体表現であるから、海外での興行もしやすかったと思われる。また、手品も言葉が必要ない演芸であり、早くから海外公演が行われた。

演劇で海外に渡った嚆矢は明治期の川上音二郎と貞奴[38]であり、その次は花子[39]である。日本の演劇を海外に知らしめた役者が女性であったことは注目したい。しかし、彼女たちは芸者であり、歌舞伎役者ではない。演じた演目も歌舞伎演目ではなく、立ち腹を切るなど、見た目に訴える演目をジャパネスクに創作して演じていた。

歌舞伎演目そのままを演じるには、言葉の壁は大きかったと思われる。日米興行会社が日本の芝居に焦がれている日系一世たちに本格的な歌舞伎を見せたい、日系二世にも日本文化を見せてやりたいと考えて、延十郎・延見子の一座を招聘したということから考えても、日系移民が米国に定着し、数が増えていた時期であったから成功を納めたといえる。壽々八・八千代一座も日系人を目当てに興行がなされた。一方、右田次は日本協会の招聘で、米国人に対しての英文プログラムを総領事館の中島氏と日本協会のレース夫人が相談して作り、上演前に英語解説をするなど、工夫がなされた。それにより米国人も数多く観覧した。一九二四年に排日移民法が施行され、排日の動きが強くなっていた時代にもかかわらず、米国人は賞讃感嘆したという。こうした米国人の反応には、ジャズ・エイジ[40]といわれた一九二〇年代、米国の社会状況の一端を見ることができる。

もちろん、集客のための工夫はいろいろ行われた。巡業する場合は日本国内でも同様だが、数日間の上演をする場合は日替わりで演目を替え、通算すると二十から三十演目を上演している。数多くの演目に合わせた衣裳や小道具類を海外まで持参するのは、なかなかに大変なことであったろう。延十郎・延見子一座ではそれだけの衣裳を新調し、屋根瓦に至るまで小道具類を持参し、本格的な歌舞伎舞台に近づける努力をし、最新の電飾機器も持ち込んだ。右田次も衣裳を日本から取寄せた。壽々八・八千代一座のハワイ公演では、劇場に歌舞伎仕様の飾り付けをして雰囲気を盛り上げ、弁慶に扮した八千代の写真入りのハンカチやブロマイド絵葉書を配って観客にサービスした。また、延見子一座では地元の子を子役に使ったので、その縁者を観客として当て込むこともできた。さらには米国在留日系人対象に脚本を公募して、それを上演するという工夫は、日系人社会と交流し、歌舞伎になじみの少ない日系人に対しても、興味を持たせるための効果的な試みであったといえよう。さらに、公演終了後に日系人の義太夫愛好家の素義会に、延十郎一座団員の太夫と三味線方は参加した。シアトル小児園新築資金へ寄附のための公演もして日系人社会との交流を行った。右田次もサンフランシスコで、学園寄附演芸会のための公演を催し、壽々八一座もハワイにおいてモイリリ母の会主催のチャリティーに協力している。また、「八千代会」が結成されて総見をしたことからは、役者と日系人社会の強い交流を見ることができる。

交流という意味では延見子たちはチャーリー・チャップリンやハリウッド女優ノーマ・シアラー、ウィルソン元大統領夫人に面会するなど、まさに日米間の国際交流も行った。右田次の公演では現地米国の総領事や日本協会の人々が大変に力を入れた様を読み取ることができ、海外交流を深める活動をした。

ヨーロッパにおいて演劇は上流階級が交流する場と考えられてきた。明治期以降、日本演劇界がそれに追随するためには、歌舞伎も近代化し、芸術的なものにすべきであるという動きがあった。本来、江戸期の歌舞伎は猥雑であり、荒唐無稽であったことにその価値があり、岸田劉生がいうところの「卑近美」[41]が歌舞伎の持つ魅力であった。にもかかわらず、明治・大正・昭和初期は、その「歌舞伎」の「卑近美」をそぎ取り、近代化の中で変革していく方向に進んでいた。「古典的で優美な日本の歌舞伎」、「右田次一座の藝は繊細にして優雅而も深刻味を帯びて居る」、「目醒めるばかりの美しい三番叟が現出し」雅致に富む舞踊である、などの言葉が踊る新聞記事を見ると、マスコミもその流れに追随していたことがわかる。知識人や劇界、そして政府の意向として、「芸術的な」「古典芸能」としての歌舞伎を育て、海外に向けて恥ずかしくないものにしなければならなかった。そして、新聞記者から見て、右田次一座の歌舞伎は「芸術的」で、日本の「古典芸能」として恥ずかしくないものであったといえよう。

しかし、「本邦芸術の神髄」を世界に伝えたい政府にとっては、市川右田次という「歌舞伎界に地歩のない」役者による「未熟」で「浅薄」なものに、サンフランシスコの「社交界の主だった人々」や「加州大学ドラマ科の教授」や著名な音楽家以下、美術家連、批評家連が興味を持ったのは、「誤解を与える」危険性のある行為と考えたのである。政府や劇界が小芝居に対して与えていた価値観がここによく表れている。松竹に移籍して活躍した五代目上村吉弥が、右田次は「松竹に引けを取らない役者」と評していた[42]。右田次が米国で上演した歌舞伎は決して「臭い小芝居」ではなかったと思われる。しかし、腕の善し悪しではなく、松竹に所属しない役者であるということで、「地歩のない」役者と決めつけ、彼

らが演じるのは「未熟」な演劇だと、体制側は貶めたのである。

松竹大歌舞伎以外に、歌舞伎を専門として活動した多くの小芝居一座があり、その中での切磋琢磨があった。また、小芝居と大歌舞伎の交流もあり、生きた芸能としての歌舞伎が存在していた。しかし、歌舞伎界が大資本の松竹株式会社に一本化して、「松竹大歌舞伎」だけが「歌舞伎」となっていくその動きが、このエピソードから見て取ることができる。倉田が「国内では何ら問題のない芸能であっても、外国では上演ないしは外国人に見せることはまかりならぬ、といった事例は結構多い。こんな話をいくつか読んでみると、芸人たちのバイタリティーと政府の対応が浮き彫りになって面白い」(43)と述べている。

それにしても、いくら日系人社会をターゲットにしていたとしても、言葉もわからない土地へ、よくも多くの一座、芸人が海を渡って出かけて行ったものである。小芝居役者たちは、普段からいかに観客を喜ばすかを考えて工夫したが、海外でも、興行を成功させるための努力をさまざまに行い、その結果、松尾国三（延十郎）は、五十万ドルという巨額の収入を得た。成功するかどうかわからない海外での興行でも、四分六の歩合制で六分の取り分で契約したところは、さすが辣腕の興行師である。右田次一座や壽々八一座がどれほどの興行収入を得たのかはわからないが、新聞紙上の連日の「大入り」が事実ならば、かなりの成績を上げたことと思われる。役者、芸人達にしてみれば、言葉もわからない、食べ物も合わない、何があるかもわからないのに、海外に飛び出そうとするモチベーションは、この興行収入の大きさであったことは間違いなかろう。

そうしたモチベーションがあったにせよ、海外での興行の工夫と、その公演期間の長さを知ると、そのバイタリティーには驚きを隠せない。さらにいえば、海外に「歌舞伎」として紹介された演劇の多くは、中山延見子、嵐八千代といった女役者が多かったという事実も、あらためて注目されるべきことではないだろうか。

本稿は文科省科学研究費補助金2019年度 基盤研究(C) 19K01235「関西系小芝居（中芝居）の活動実態と地芝居との影響関係―地芝居の価値再発見に向けて」の補助を受けて進めている研究の一部である。

付記

本拙稿脱稿後、中村高駒（のちの澤村宗七郎。右田次とともに渡米した）が大正六年に渡米している事実が判明した。これについては改めて報告したい。

註

(1) 茂木千佳史編『歌舞伎海外公演の記録』松竹株式会社、一九九二年。

(2) 大谷竹次郎「歌舞伎海外進出の実現」前掲茂木、三〇～三二頁。

(3) 永山武臣・河竹登志夫対談「特集　歌舞伎の海外公演②　歌舞伎海外公演―これまでとこれから」『演劇界』第四四巻第九号、演劇出版社、一九八六年、七四～八二頁。

(4) サンフランシスコ、ロサンゼルス、シアトル、ハワイの邦字新聞は国立国会図書館および邦字新聞デジタルコレクション https://hojishinbun.hoover.org/?l=ja において閲覧した。また、現地地名は新聞紙上記載のままでなく、基本的には現在通用する地名で記載した。日本人以外の人名も、現在一般的に表記される名で記載した。

(5) 拙稿「昭和五十年まで活動した中芝居劇団 市川市蔵劇団の軌跡 その一―小芝居の歌舞伎で活躍した役者家族とその周辺―」京都精華大学『京都精華大学紀要』第五四号、二〇二一年、七一～八八頁。および、拙稿「昭和期まで活躍した女性歌舞伎役者たち―女役者の動向と消長」京都精華大学『京都精華大学紀要』第五六号、二〇二三年a、八九～一〇四頁。

(6) 松尾國三『けたはずれ人生』講談社、一九七六年、一四四～一八六頁。松尾国三「赤毛布の旅芝居―大正十五年にアメリカに出掛けた巡業実話」『演劇界』第四一巻第一四号、演劇出版社、一九八三年、七四～七八頁。

(7) 森野正一『私の思い出』日貿出版社、一九七一年、七四頁。

(8) 前掲松尾、一九八三年、七四頁。松尾は三十五名と語っているが、『新世界』大正十五年（一九二六）十月十日記事では「二十二名」、十月十一日記事では「十八名」とある。

(9) 前掲松尾、一九七六年、一五八～一五九頁。

(10) 前掲松尾、一九八三年、七七頁。

(11) 前掲松尾、一九七六年、一五九～一六一頁。

(12) 前掲松尾、一九七六年、一六一～一六三頁。

(13) 前掲松尾、一九七六年、一六三～一六五頁。

(14) 前掲松尾、一九七六年、一六七頁にはホノルルでの公演は三日間と述べているが、新聞記事を見る限り七日間の興行を行っている。

(15) 演目の表記は新聞に記載のままではない。

(16) 前掲松尾、一九七六年、一六五頁。

(17) 前掲松尾、一九七六年、一七二～一七三頁。

(18) 前掲拙稿、二〇二一年、八六頁。および、前掲拙稿、二〇二三年a、九九頁。および、拙稿「小芝居・中芝居役者の芸名系継承と歌舞伎役者 岩井小紫の名跡について」東京都立大学人文科学研究科『人文学報』No.519-2 社会人類学教室一六、二〇二三年b、一二一頁。

(19) 前掲松尾、一九七六年、一七三～一七六頁。一七四頁に『娘道成寺』上演時の写真が載る。

(20) 『羅府新報』昭和六年六月十一日～七月二十七日、『新世界』七月十四～二十八日、『日米新聞』七月三～十七日、『布哇報知』八月二日～九月一日の各記事。

(21) 前掲松尾、一九七六年、一七七～一八六頁。

(22) 近代歌舞伎年表編纂室『近代歌舞伎年表 名古屋篇　第十六巻』八木書店、二〇二二年、六、八～九、十～十一、十五～十七頁。

(23) 倉田喜弘「芸人飛翔して、…」『図書』五六八号、岩波書店、一九九六年、四〇～四三頁。および『布哇報知』昭和二年八月二十九日、九月十一日記事。新聞聯合社発行「聯合通信　RENGO SERVICES」昭和三年四月三十日にも、昨年九月一日に渡米したと記載されている。この記事は、外務省資料「於桑港本邦歌舞伎芝居米人間ノ演芸関係」国立公文書館アジア歴史史料センター Web サイト　文学、美術及演劇関係雑件／演劇関係 7．於桑港本邦歌舞伎芝居米人間ノ演芸関係 https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/listPhoto?LANG=default&REFCODE=B04012347800&BID=F2006092117024158466&ID=M2006092117024258475&NO=&TYPE=dljpeg&DL_TYPE=pdf の中に含まれる。

(24) 九月十日の宣伝文では「山村内近」とあるが、翌九月十一日の記事では「山村右近」、九月十七日、九月二十日などの記事では「山村内匠」となっており、「たくみ」のふりがなを振ったものもあるので「内匠」が正しいようである。

(25) 前掲外務省資料、昭和三年二月十七日、在サンフランシスコ総領事井田守三より外務大臣田中義一宛に提出された公文書。

(26) 前掲外務省資料、井田守三が外務省に送った公文書。および『新世界』昭和三年一月二十二日記事。

(27) 前掲外務省資料、井田守三が外務省に送った公文書。この文書に、「市川右田次大一座　名題大歌舞伎　FAIRMONT HOTEL」と題する英字のパンフレット全文が添付されている。歌舞伎の歴史解説に始まり、各演目の配役と粗筋が英文で書かれている。

(28) 前掲外務省資料、井田守三が外務省に送った公文書に、サンフランシスコ各紙の英字新聞切り抜きが添付されている。

(29) 前掲新聞聯合社発行「聯合通信」。

(30) 前掲新聞聯合社発行「聯合通信」。

(31) 前掲外務省資料、外務大臣田中義一からサンフランシスコ総領事井田守三宛に出された公文書。

(32) 前掲倉田、四一頁。

(33) サンフランシスコの邦字新聞等から、この期間の宣伝等の発見に致っていない。

(34) 前掲森野、八二頁。

(35) 瀧代は、大正十五年（一九二六）、名古屋歌舞伎座の「東京女歌舞伎」や、昭和二年（一九二七）の京都三友劇場の公演に参加している。生没年不詳。

(36) 楓女については拙稿二〇二三年a、一〇一頁参照

(37) 阿久根巌「海外巡業の編成」『サーカスの歴史―見世物小屋から近代サーカス』西田書店、一九七七年、三七～四〇頁。

(38) 山口玲子『女優貞奴』朝日文庫、一九九三年。

(39) 澤田助太郎『ちいさい花子　プチト・アナコ』中日出版社、一九八三年。大野芳『マダム・ハナコ』求龍堂、二〇一八年。

(40) フィッツジェラルド『ジャズ・エイジの物語　フィッツジェラルド作品集1』、渥美昭夫、井上謙治編、荒地出版社、一九八一年（一九二二年）。

(41) 岸田劉生『歌舞伎美論』早川書房、一九四八年（初版『演劇美論』刀江書院、一九三〇年）。

(42) 西村彰朗『一方の花　五代目上村吉弥の生涯』京都新聞社、一九九三年、四七～四八頁。

(43) 前掲倉田、四三頁。および倉田喜弘『海外公演事始』東京書籍、一九九四年。